

ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業
取組の概要と選定委員会からの主なコメント

代表校名 (連携校名)	宮崎大学 (東京慈恵会医科大学) 計2大学
事業名	地方と都市の地域特性を補完して地域枠と連動しながら広がる 医師養成モデル事業 ～KANEHIRO プログラム：病気を診ずして病人を診よ～
事業責任者	医学部長 菱川 善隆
事業の概要	
<p>本事業は宮崎大学と、宮崎県高岡町出身の高木兼寛を学祖とする東京慈恵会医科大学の間で締結された大学間包括的連携協定を基盤に、令和4年度入学者選抜から恒久定員内で地域枠を15名増の40名に拡充した宮崎大学が代表校を、東京慈恵会医科大学が連携校を務める。新たに確立する「KANEHIROプログラム」では、地域医療や多職種連携に関する講座型科目を拡充し、実習型科目の診療参加型臨床実習に地域医療、救急医療、総合診療、感染症に重点をおく専門コースを新設する。地方と都市の異なる地域特性を補完する単位互換制の交換実習を実施し、オンデマンド教材やVR・シミュレーションによる領域横断的な教育も展開していく。地域枠と連動しながら、新たな時代の多様な医療ニーズに応え、診療にあたる地域を問わずに適切な医療を実践できる医師を養成し、地方が抱える医師不足や医師偏在の解消に資する教育モデルの確立を目指す。</p>	
選定委員会からの主なコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等	
<p>○地域と都市部の連携、3つの枠設定を設けるなど、コンセプトが大変明確であり分かりやすい。 ○単位相互互換に基づく臨床研修の学生交換制度は効果が期待できる。 ○バランスの良いプログラムであり、国保病院を舞台とした地に足の着いた現場体験とVRやオンライン連携の特徴は魅力的である。 ○これまでの実際の取り組みの豊富な実績を背景にした記述は、本プロジェクトの実現可能性を納得させるのに十分な内容と考える。関係各位と調整を十分に行ったと窺い知れる。 ○大学間包括的連携協定に基づくプログラムであり、事業終了後も長期にわたり継続されることが期待される ○年度ごとの、特に初年度と次年度の重点化とそれ以降の継続性のプランの具体性に優れている。 ●既存の臨床教育に加えて、どんなことを付加すれば、地域で活躍できるようになるのかを明確にすべきである。 ●連携校の貢献は、教育プログラムの基本的理念の提供のみで、具体的な貢献が見えない。 ●地域医療の施設が必ずしも全宮崎県をカバーしているわけでない。また、都会型地域医療の教育の継続性に不安がある。 ●全国の地域枠教育に横展開を図るべき事業であるにも関わらず、その視点が欠落しているように感じられる。 ●相互互換による実習の交換に参加した学生からのフィードバックを確実に言い、意図した教育効果でない場合は速やかに是正できる体制を構築すべきである。 ●二年目以降の計画について、内容に関するものが薄い。</p>	